

生物多様性と文化
のつながりを学ぶ

紫野 今宮神社
2025.10.26



©ATELIERSHIMURA

いのち
植物の生命と色

～染めの手仕事を通じて植物の「いのち」を感じるプログラム～

きょうと生物多様性センター



開催趣旨

草木染めは、四季折々の多彩な植物の色を映し出しています。古来より人はその色を重用し、豊かな感性を育んできました。万葉集にも登場する「紫草」は、中でも高貴な色を染める際に使用され、現在では大変希少なものとなっています。この「紫草」に名前の由来があるともいわれる京都市北区「紫野今宮神社」において、植物の色を体感し生物多様性の恩恵を感じ、人と自然との共生を考えるプログラムを開催しました。

本事業は、三洋化成社会貢献財団の御支援により実施いたしました。

PROGRAM



I 染めのワークショップ
「ムラサキ」を染める

II 鼎 談
～染めの手仕事と今宮神社の歴史から
生物多様性を考える～

III ムラサキ再生プロジェクトと
植物「ムラサキ」のお話

同時開催 ハレトケ市

紫野今宮神社の氏子が中心となり、地域への思いを共有する人達が集まった「ムラサキノハレ」が主催する市。地域のつながり、神社のつながりを取り戻すために活動される。今回が8回目の開催となる。

II 染めのワークショップ 「ムラサキ」を染める





II 鼎談 染めの手仕事と 今宮神社の歴史から 生物多様性を考える

はじめに

きょうと生物多様性センターは、京都の伝統や文化、暮らしを支えてきた自然の恵みを守り、次世代につなげていくため様々な取組を行っております。その一つとして、京都の伝統文化と生物多様性のつながりを学び考える機会となるよう、本日は、ここ紫野地域にゆかりがあるともいわれる植物「ムラサキ」と「染めの手仕事」をテーマとしたワークショップと鼎談を行うこととなりました。開催にあたりご尽力いただきました皆様方に感謝申し上げます。

きょうと生物多様性センター 湯本 貴和

鼎談

登壇者

アトリエシムラ 代表 志村 昌司 様

紫野今宮神社 宮司 佐々木 従久 様

(株)ミシマ社 代表 三島 邦弘 様

(以下、敬称略で掲載いたします)

三島 僕は、今宮神社の近所に住んでおりまして、普段は歩きや自転車で、よく今宮神社に来させていただいております。本日は司会をさせていただき、皆様にお会いでき大変うれしく思っています。

志村 みなさま、こんにちは。アトリエシムラ代表の志村昌司と申します。私たちは、京都の嵯峨野に工房を構えております。祖母の志村ふくみは1924年生まれで、ちょうど先月、101歳を迎えました。私たちは、祖母の代から受け継いだ染織の仕事を、現代、そして次世代へとつないでいくために日々活動しております。どうぞよろしく願いいたします。



佐々木 今宮神社の佐々木と申します。当社の歴史についてご紹介します。昨年(2024)の大河ドラマ「光る君へ」がございましたが、その時代、疫病が流行り、その疫神を鎮め祀る紫野御霊会[1]を行ったことに始まり、その後の変遷を経て、現在は西陣地域の氏神さんになっているお社でございます。地域を守るために御霊会が行われ今宮社ができて上がったわけですが、長い歴史の中で神様の性格もどんどん変わってきています。変わってきていること自体が神様とつながっていてハレトケ市[2]や新しい取組へもつながっていると思います。

三島 それではここからいよいよ本題に入りたいと思います。今日のテーマは「染めの手仕事と今宮神社の歴史から生物多様性を考える」、なかなか長い、そして手強いテーマを預かったわけですが、私、7月に「出版という仕事」という本を出しまして、その中で遠く離れた2つの企画をつなぐという話をしているんですが、まさに今日はその実践の場かなと思っております。みなさん、「染めの手仕事」と「今宮神社の歴史」がどうつながっているかな、と思っておられるのではないのでしょうか。僕自身もそうですが、この鼎談で2つがつながって、この地域に生きるということ、その豊かさとは何か、皆様と共有できればいいなと思っております。志村さん、御活動を教えてください。

[1] 正暦5（994）年に一条天皇の命により船岡山で執り行われた。今宮祭の起源。

[2] 今宮神社で行われる紫野や西陣にゆかりの住民参加の市。今回で8回目。

志村 私たちは普段、京都の嵯峨野で草木染めを行い、染めた糸を手機で織って、着物や帯などを制作しております。祖母の代から続く手仕事を継承し、それを一つのブランドとして活動を続けています。私たちの制作の根底には、柳宗悦氏の民藝思想があります。自然に対する畏敬の念、そして自然こそが人間の活動の土台であるという考え方です。そのため、植物や蚕を単なる「素材」として扱うのではなく、敬意を持って接することを制作姿勢として最も大切にしています。

午前中のワークショップでは、紫根染めを行い、非常に素敵な色に出会うことができました。そもそも「染め」の原点は、ファッションや好みの色を纏うことではなく、植物の魂や精霊を糸に写し取ることにあります。工芸の成り立ちは、神事や祈りと非常に近いものでした。

植物の御霊^{みたま}を写し取り、その色を身に纏うことによって悪霊から身を守るということは、神社の役割にも通じます。今でも伊勢神宮では、神御衣祭^{かみみそさい}[3]という天照大御神に奉る奉織をされていますが、工芸の起こりは神様からお預かりした素材を神様にお返しするという、神道、信仰と結びついた行為にあります。本日、神社でさせていただくというのは、この工芸の成り立ちに立ち返るような本来の営みなんじゃないかと思います。

三島 今のお話について佐々木宮司いかがでしょう。
佐々木 そうですね。まさに、神様のお供え物とか神社で行われる祭りなどはもちろん、いろんな芸能などもそれぞれの地域にそれぞれ皆さんの想いや姿勢があって、地域の植物や動物、生物と共に生きる形で人の生活が成り立っています。地域の文化は、地域での生物の在り様^{よう}とつながっていて、地域の文化を継承していこうとすれば、その地域で育まれている植物、動物、生物といったものが継承されていって始めて成り立つのです。

近頃は出来上がってしまった祭りの形態を重視するあ



まり、もともと祭りで使っていたけれど、今はその地ではできなくなってしまった物をどこか他所から取り寄せて使うということが多々ありますけれども、果たしてそれが本来の願いの形だったのか。その地でただの物や形で神様に喜んでいただく、それが本来、地域での感謝を表す祭りです。ですから時代によって変化するものです。その地でできなくなったのであれば、何か方法があればもう一度それを取り返す。もしくは、単なる人間の欲望のままに便利なものに置き換わったのであれば、それを取り返していく必要がある。やはり、共に生きる姿こそが地域での文化や生物なのかなと思います。

三島 今まさに核心のお話をいただきましたが、お二人のお話で共通して感じたのは、現代の人間が望んでいる理論ではもともと自然にあったものや精神、あるいは魂は、自分たちでコントロールできるもので、ここにはないものはどこから持ってくるという、ある意味、人間中心主義が当たり前のように蔓延^{はびこ}っている。普段の志村さんのお仕事はそういうものと対局にあるような世界でやってらっしゃいますが日々どのように感じておられますか。

志村 私たちの分野には、大きく分けて「工芸」と「芸術」という2つのカテゴリーがあります。工芸の世

[3] 毎年春と秋に行われる天照大御神に絹と麻の反物をお供えする神事

界でも、作家として活動するようになると、どうしても芸術における「自己表現」という問題がでてきます。そうなると、まずデザイン画があり、そのイメージに合わせて素材を集めたり染めたりすることになります。これはいわば「人間中心主義」的なものづくりになりがちです。しかし、私たちの染織は植物が中心です。いわば「最初に色がある」のです。自分の好みの色を作るために作為を加えるのではなく、染め手はその植物が持っている本来の色を引き出すことに集中します。日々の仕事の中で、何百、何千という色系が生まれますが、私たちはそのたまった色系を見て、それらをどう組み合わせるかを発想します。「デザインのために色を作る」のではなく、「まず植物の色があり、それをどう生かせば着物として、作品として美しくなるか」を考えるのです。

ここで、「植物の本来の色とは何か」という究極の問いが残ります。今日の午前中に行った紫根染めを例に挙げましょう。三回染めて^{つばきあく}椿灰汁で媒染しましたが、これは計量されたマニュアル通りの作業ではなく、すべて感覚の世界です。自分の感覚で「今だ」と感じた瞬間に、染液から糸を引き揚げます。つまり、自然と自分との対話の中で、「どの頃合いがこの植物の色が最も美しいか」を感じ取ることが、何よりも大切なのです。

三島 なるほど。

志村 だからこそ、草木染めはその人の「感性」が問われるのです。今日のワークショップでは、時間の関係もあり、ある程度の目安でおこないましたが、ご自身で染めるときには決まった「答え」はありません。すべては植物との対話の中で決まってくるものです。つまり、植物と自分自身が対話できなければならないのです。

しかし、現代人はどうしても、自分の心と植物との対話よりも、マニュアルや本に書かれていることを求めてしまいがちです。実はそれこそが、植物との対話を阻んでしまう壁になります。自分の感覚を信じることも、本に載っている数値や手順に従いたくなくて

しまう。出版されているものが悪いというわけではありませんが、それに頼り過ぎると草木染めとの向き合い方が違ってしまいます。だから、私たちの工房にはマニュアルがないのです。

三島 なるほど。ありがとうございます。すごくおもしろいですね。だから、日々のその感覚を整えるということがすごく大事になってくるわけですね。

志村 そうですね。

三島 神社という場は疫病を鎮めるというお話が最初にありましたが、人々の日常の感覚を整える場所でもあるのかなど僕は感じるんですが、宮司は今宮神社をどういう場として日々つとめておられますか。

佐々木 神様ということをどう捉えるか、どう理解するかということと関わってくると思うのですが、私の思いとしては、八百万の神が地域ごとにおられて、それぞれの地域で作り上げていかれるもの。そもそも、神様がこの地を治められる、という発想ではなくて、その地域に生活されている方々の共通の願いとして、その地で、災いから逃れ、生活や暮らしが成り立っていく、その中で祭りという形で、共同作業が行われ、祭りを皆で一生懸命やったから今年是这样なんだという共通の思いを持つ。そうした行動と結果として捉える現象を循環させていく中で、司っておられる神様を感じ取るようになる。それが神様。



祭りを継承して、毎年新たなことを積み重ねることによって、皆さんの願いも生活も徐々に少しずつ変化し祭りの形態も少しずつ変化していく。そういった形が本来の有り様で、皆さんの願いを乗せて祭りを行うこと



で、お互いにこの地で循環しながら、成長していく。神様に対して何かをするというよりも自分自身に対してやっていること、全体としてそれで1つの地域、1つの生命として、広くいえば地球全体が1つとして生きているという感覚だと思います。ですから、祭りも、誰かのためにやるのではなくて、自分のこととしてやっているといった感覚が本来の感覚なのだと思います。それが今はだんだん変化してしまっていて、自分自身とは別の存在のように分かれてしまっていると感じます。

三島 お祭りとしては、今日のようなハレトケ市も、1つのそういう場として、捉えておられるのでしょうか。

佐々木 そうです。今、実際に行われている祭りというのは、形式をなぞることで精一杯になってしまっている。毎年の祭りが本当にこれでいいのか、本質はどうだったのか、もっと皆さんの中で討議されるべきで、まさにコロナのときはそうでした。去年と同じ祭りがどうやってもできない。そうしたとき本当にどうしたらいいのか、本質に返らないといけないと思います。ただ、神輿が出なくなったということではなく、その時々のできることを一生懸命考えるということが祭りですから。そして、祭りは、開催の時期だけではなく、この1年間、ともに地域の方々と暮らしながら考えていくということです。そういったことで、地域の皆さんと繋がりを少しでも普段から持たたいとい

う意味でハレトケ市をやっています。

三島 ぼくたちミシマ社もハレトケ市は第1回から参加させていただいています。単に本を届けるということを超えて、自分の気持ちや心が透明になったり整ったりという感覚を毎回受け、メンバーみんなもハレトケ市が大好きで出させてもらっています。ありがとうございます。志村さん、今回、ハレトケ市は初めてご覧になられたと思いますがどうお感じですか。

志村 宮司さんのおっしゃる通りです。お祭りの本来の意味というものは、いま忘れ去られつつあります。

「お店が出るから」「賑やかそうだから行ってみよう」といった軽い感覚で足を運ぶことが多く、祭りの本来の意味が何であったのか、それを実感する機会はなかなか持てないのが現状ではないでしょうか。お話を伺いながら、改めてそのように感じました。

三島 はい。

志村 私たちも、「植物の生命の色を染める」とよく言います。しかし、「生命」という存在そのものを、目で見るとは決してできません。この目に見えない生命の活動を、この世に現前させてくれるもの、それが「色」なのです。たとえば、藍で言うとわかりやすいでしょう。私たちの工房では、月の神である「月読命」^{つきよみのみこと}に祈りを捧げ、新月の日に藍建て^{あいたて}で[4]を始めます。それから2週間ほどで藍が建ち、ちょうど満月の頃に染め始めます。そこから約3か月間、藍は甕の中で生命を宿し、3~4ヶ月ほどでその一生を終えます。藍が建ったばかりの若い時は、非常に濃い色をしています。月を重ねるごとにだんだんと淡くなっていきます。これを人間の年齢に例えるならば、50代、60代、70代……となっていくにつれて、色はだんだんと淡く、透き通っていくのです。しかし、濃い色と薄い色、それは優劣ではなく、「同じ生命の別の表現」に過ぎません。1ヶ月目の藍と4ヶ月目の藍、色は全く違いますが、根源にあるのは同じ一つの生命なのです。今、祖母は『般若心経』を写経しておりますが、まさに藍建ては「色即是空」^{しきそくはくう}の世界です。時間の経過とともに色は淡くなり、最後はまったく染まらなくなる。

[4] 染料をつくる仕込み。藍は大きな甕の中で歳月をかけて発酵させる。

それは藍がなくなった、生命が尽きてしまったということです。そして、また次の新しい藍へと命が繋がっていきます。色とは、生命が移ろいゆく変化を刻一刻と映し出すものです。今日染めた紫根も、1ヶ月後の紫根になればまた違う色になります。同じ生命であっても時間とともに変化し、その一瞬の時間を切り取ってこの世に現出させること、それが草木染めなのです。

そういう意味では、私たちは「生命の移ろい」という変化の色を、一瞬だけいただいているといえます。だから、同じ色が出ないのは当たり前で、次の日に染めればもう違う色になっているのです。私たちの目に見えない生命の世界を、一瞬だけ垣間見せる芸術。それが、草木染めの世界ではないかと思えます。

三島 ありがとうございます。日々色が変わっていく中で、素晴らしい色が出たということはありますか。

志村 それはありますね。草木染めは本当に複雑で、染める人によっても色は全く異なります。「もうここで引き揚げよう」「今、媒染しよう」そうした判断はすべて、染め手と植物との対話の中で、その人の感性によって決まるからです。ですから、人によっても違いますし、植物の採れる時期や種類によっても、当然色は変わってきます。

明治時代などの古い糸を見ていると、今なお非常に力強い色をしていることに驚かされます。私たちは「今」しか生きていないので、現在の生命の勢いしか肌で感じることはできません。しかし、昔はもっとエネルギーに満ちた野生の植物がたくさんあって、生命そのもの



のが元気だったのではないかと思うのです。

現代は、地球環境の変化などによって、生命力が少し弱まっている時代なのかもしれません。生命にも「盛衰」というものがあるのだと感じます。昔に比べると、今の植物のエネルギーは減ってきているのではないかな…。草木染めの仕事を続けていると、実感としてそう思うことがあります。

三島 面白いですね。

志村 比較はできないですね、昔の植物はもう生きていませんから。でも、奈良時代や平安時代の染織品を見ていると、それはもう異次元の色です。

三島 ありがとうございます。宮司、そういう地球のエネルギーの盛衰というのは、神社で感じられますか。また、さきほどハレトケ市の話をしていただきました。このように一般に開かれた祭りなどは歴史的に見て今宮神社であったのでしょうか。

佐々木 はい、ございます。夜の市という形でお店が出たり、あるいは、11月1日に神事が行われますけれども、それに合わせてお野菜などを売られたりということはありません。地域とお社が普段の生活の中で繋がっていて循環しているからこそお社が存在している。ですからもう一度、ハレトケ市という形で地域とお社の循環を繰り返していきたい。今宮神社には4月のやすらい祭、5月の今宮祭がありますが、ややもすると形式を追うので精一杯になってしまって、特に若い方々にとって地域の祭りというのは、負担ばかりのものになってしまっている。生命の本質は、共に生きることが一番の喜びであるということであり、生命である以上お互いどこか持っているはずなんですよ。それをうまく表現する場として、かつてはそれぞれの祭りが全部そうだったはずなんです。無理やり作ったり意味もなくできた祭りはまずなくて、地域の情熱があっただけで上がってるわけですが、いつの間にか膠着してしまっている。

ですから新たなエネルギーを集約できる場として、七夕祭を10年ほど前からさせていただいております。これは今宮神社の中に織物の神様である織姫社があるの

ですが、地域の産業が縮小してしまったことなどもあり20年ぐらい前からお祭りができなくなってしまった。しかし、自分たちの今の願いを表現できるような本来の生き生きしたお祭りをもう一度やらなきゃいけない、ということで七夕祭をはじめ10年を経て、ようやく皆さんの中で共にやってるんだ、ああしてみよう、こうしてみようという意欲がどんどん生まれてきています。ただ、地域の方だけでそれが成り立っているかということ、実際に集まっていたいてるのは地域の方々と、もっと広い範囲の思いに賛同していただく方々になっています。そういった方々はお祭りの時にしか集まるのが難しい。本来は生活の中で自然に繋がっていたものが、なかなかそうはいきません。そこで、もう一度日常の中につながりを持てるように、ということでハレトケ市をやっておりまして、起爆剤としてつないでいながら、徐々にその思いを共有する方が集まっていたいてるように思います。これまで継承してきたもともとある祭りの中にも、エネルギーを集約してつぎ込んでいけば、もう一度活性化できるんじゃないか、そういった思いでいます。

三島 面白いですね。今、お二人の話が重なってきたように思います。もともとあった祭りは、年数を経ると、どうしても決まった形式を追うことばかりになってしまう。そこで、新しい形を変えたお祭りが提案されて、そしてまた、集まる人々も地域を超えて少し広がった形で行うということも、この時代においての1つの在り方だろうと思いつつ伺っていました。

志村 かつて、自然もすごい力をもっていて、昔の染めを見たときに、ある種、原初的な力を感じたということですが、今、近いものを表現するのは難しいのでしょうか。

志村 そうですね。工芸の分野で言うと、進歩史観は成り立ちません。昔のものを再現するのは間違いなく難しいですね。

三島 なるほど。

志村 奈良時代の正倉院に収められている頃の織物が「過去の最高点」であり、現代の私たちにはもう作る

ことができません。作り方がわからないのです。織物の世界でも再現を試みる方はいらっしゃいますが、当時のクオリティを出すのは非常に難しいのが現実です。そういう意味では、大きなテーマになります。



の私たちの文明の歩みや進化というものが、本当に良くなっているのか。それとも、地球温暖化などの様々なひずみが生じている現状を見ると、ある意味では退化しているのではないか。その評価は非常に難しいところだと思います。織物の話に戻しますと、私たちは草木染めをして手で織りますが、その前段階として、まず「糸を作る」という工程があります。絹であれば「お蚕さん」から糸を紡ぎます。また、絹が中国から伝来する前の日本は「自然布」の世界でした。大麻や、沖縄の芭蕉布や静岡の葛布のように、その土地に生えている植物の繊維を績んで、一本の糸にして織っていました。つまり、織物の原料となる糸は、それぞれの土地の植生に根ざしていたのです。楮、大麻、苧麻、葛…そうした多様な植物の繊維が、やがて動物性の絹糸へと変わっていった歴史があります。ですから一度、文明をずっと遡って、自分たちが縄文時代くらいまで戻ったとしたら、一体人間には何ができるのか。それを考えてみるのにはいい時期なのではないかと思うのです。

先日、新聞で読みましたが、今アメリカの若者の間では、ホワイトカラーではなくブルーワーカーを志望する学生が増えているそうです。事務職などのホワイトカラーの仕事は、やがてAIに取って代わられるかもしれません。しかし、AIには絶対にできない仕事——染めたり織ったりすることもそうですが、自分の肉体や五感を使った仕事は、簡単には代替されません。パソコン上の作業はAIができるかもしれませんが、手仕事

は残るのです。これからの時代、本当に人間にしかできない仕事とは何か。この自然界の中で、人間に与えられた役割とは一体何なのか。今は図らずも、そうした根本的なことを考え直す時期に来ているのかもしれない。

三島 そうですね。今、志村さんのお話を伺いながら、なぜ鼎談という形になっているのか分かってきました。僕らの出版はもともと和紙、楮、三桠から作られていて、朝鮮半島から入ってきた技術で、初めて和紙が作られて、紙漉きの技術というのは限られた人だけができて、それを、口でしか言い伝えられなかったのが紙で伝わるっていう。

志村 そうですね。

三島 これはもう本当に革命的なことであって、権力者だけが持っていた特権だったので、それが紙に捧げる、祀るというものとして、紙漉きの技術は各地で発展していったという歴史があり、この観点からすると、僕たちが今持ってきている本は、和紙は使ってませんし、完全に近代の産物で、化学薬品をもとに作られた洋紙をベースに大量生産で作る。まさにある種の対極。大量に作るっていうところは満たしているけれども、和紙は千年前のものでも残っているのに対して、今の本は、残念ながら数百年したら虫食いだったりとか紙やけしたりとか、どこまで読める状態かわからないです。ぼくらの出版と通じるんだと思いながら伺いました。だから、まさに神社とつながった組み合わせだったなと感じました。

志村 人間の役割、あるいは文明社会やものづくりといっても、実は人間ができることというのは、非常に少ないのです。植物がなければ染めることはできませんし、お蚕さんや麻がなければ糸も作れません。私たちは、ほとんど何もできないのです。最後に少しだけ手を貸して、染めて織るということはできても、全体で見れば本当に「1%」もないくらいの仕事ではないでしょうか。99%以上は自然が営んできたもので、私たちはその最後に、少しだけ手を加えさせてもらっているに過ぎません。

ですから、これだけ人間の活動が肥大化し——「人新

世」などと言われていますが、本来人間が自然の中で果たすべき役割というものを、今一度見つめ直さなければなりません。お蚕さんも麻も、人間には決して真似できないことを、生命として育ててくれます。それなのに、私たちは自分たちの活動のために、その土台を破壊しつつある。全体で見ると、本当に大きなものを失いつつあるのではないかと…そう思わずにはいられません。

三島 かつて昔の方々は、ほとんどは自然が育てて人間がほんの少し手を加えているということを感じながら生きていたんだろうと思うんですけど。

志村 畏敬の念ですね。

三島 それを僕たち現代の人は、人間ができる範囲が多くなった、と勘違いしてしまっていたけれど、今、そのほとんどをAIができるようになっていて、そうすると、人間が本当にできることは何なのかっていうのが問われている。AIに教えられる。そういうAI時代の世の中で、神事や祈るという行為などの神社の役割について宮司に伺いたいと思います。

宮司 AIの時代だからこそ神社が必要とされるのだと思います。心の集約点として、今も継承されていて、これこそが継承されるべきことであって、それ以外の祭りの形だとかは変わっていったり当たり前だし、それこそが生きている証だと思います。人同士だけでなく、すべての生命がともに生きているという状態ですね。お蚕さんであったり自然の生命をいただいて使わせていただく。でも、いただく以上はそれを使い切ることが大事だと思うんです。それがともに生き





るということで、命をいただかずに生きるってことはできないわけですから、いただかざるを得ない。であれば、それを最大限いただき尽くすことが、それを生かしてあげる、ともに生きていることだと思います。自然とともに循環し生きてきたかつての姿をもう一度思い直さないといけません。何か全部数字に置き換えて、数字を積み重ねるたびに自然を侵食してしまつて、またさらに電力を消費して、そのためにさらに自然が破壊されていく、そういった今の世の中の在り様、今の時代、本当にそれがいいのか。すべてを数値化して、それを最大化することが目的のような形で進んできましたが、そうではない本来のそれぞれの生命がそれぞれを尊重している生き方というものをもう一度考え直す必要があると思うんです。もう、確実に今そういう状態になっていて、行き着く先がない状態のように思います。その根本的な在り様、ともに生きるということの喜びこそが、すべての生命に共通の喜びだと思うんです。そこへもう一度立ち戻る必要があると思います。人ができることはほんのわずかです。巨大なエネルギーを使った乗り物での移動、いろんなものをあちこちから動かす物流、それらが本当に果たして人類の幸福なのかを、もう一度考え直す必要がある。まさに神社という場も、それぞれの地域ごとで本来やっていたことをそれぞれの地域で取り戻していくことで、小さな1つですが、それが全体へと広がって、何とかもう一度考え直すことができるのではないかと考えています。

三島 宮司が繰り返しおっしゃっていた「ともに生きる」ってということ、地域であるということ、そういう小さなコミュニティー、共同体を皆が見直している時期だと思います。一方で、人や物の大きな移動が当たり前になってしまったグローバル化の時代にあって、この神社もそうだと思いますが、例えば京都も海外から観光客が増えました。その中で、日本や日本の伝統的なものが海外から評価されることがあると思うのですが、志村さんはどうお感じですか。

志村 そうですね、私たちはフランスやドイツの展覧会でワークショップを行ったこともありますが、現地の方々は非常に関心が高いですね。自然環境への配慮という点では、むしろヨーロッパの方が意識は進んでいると感じます。日本は、結果として自然や伝統が残っている部分はありますが、意識の面ではだいぶ違うように思うのです。おそらくヨーロッパの方々にとって、日本の伝統工芸の営みや、そこに宿る「仏性」のような精神性を見出すことは、彼らが近代化の中で失ってしまった文化への憧憬なのかもしれません。他方で、明確な違いを感じる面もあります。先ほどの「人間の役割」についてですが、これはキリスト教の影響があるのかもしれませんが、向こうでは「人間には特別な役割がある」という考え方に立つことが多いですね。例えば、私はリルケという詩人が好きなのですが、彼の考えに「人間は、ものを言わぬ自然の代わりに、芸術を通じて言葉を発する」というものがあります。つまり、人間は自然から委託を受けて、その代理として芸術作品を作り出すのだ、と。ある意味、人間という存在が非常に特別なものとして認められているのです。

一方で、民藝運動の考え方は違います。人間に特別な役割などありません。むしろ、「人間がいかにかちっぽけで、自然の前で謙虚にあるべきか」を説くのが民藝運動です。ですから、「無心でものづくりをする」というのは、自分自身が空っぽの「器」になり、そこに自然の八百万の神が入ってくる…その感覚を共有しなければなりません。

人間自身に何か特別な意味を持たせるのか。あるいは、人間は他の生命と平等であり、その役割はちっぽけなものだと考えるのか。この意識の差は、ものづくりに対して非常に大きな違いを生むと思います。ヨーロッパの文献などを読むと、やはり人間の特別感をひしひしと感じる面がありますね。

三島 そうです、本当に違いますね。始まりからそもそも違いますから。宮司、海外の参拝客は多いでしょうか。

佐々木 そうですね。コロナの時期を経て、また一段と多くなりました。コロナ以前と比べると、神社のことをもっと深く知ろうという方は増えましたけれども、一方で、決まるとおりのことを求めてこられるのが日本の方。どういうお参りをさせていただいたらいいかをお尋ねになる方が結構多いです。ここではこうすべきということを踏まえて行動したいという方が増えている。一方で、独自に神前で般若心経を唱える方もおられます。

三島 そうですか。

佐々木 かつては神社だと、祖父母と一緒に参りして知らず知らずに、ここではこうするものだということが身についていたと思うんです。それが今はそういった経験が少なくなってきたのか、本当に両極端です。

三島 なるほど。

佐々木 かつてはその中間でね、皆さん大体こんな形かなとされていたことが、今は両極端に分かれていて、世代によってもお参りの仕方が変わってきています。

また、海外の方の中には、御神前の段へ腰かけられることもあり、文化の違いはあります。日本の方でも観光として参りされている方は、ここで何かを感じとりたいというよりは、知っている知識をなぞってお参りされたい方が多い。神社としては、先ほど言いました地域の願いと祈りが集約された場所ということ、何とかもう一度取り戻していきたい。お参りや観光に関わらず、そこに足を踏み入れていただいたら、何か感じる場でありたいと思います。ですからできるだけ

今は、神社の中には説明書きや注意書きは入れません。

三島 そうですね。

佐々木 そういったことをしないで済むよう、逆に言えば、観光の方がこられても、思いを感じられるような場にしていきたい。それは、建物だったりしつらえだったりということもそうですが、地域の方々とともに、そういう形をつくりあげていきたい。神前に腰かけられるようなことがあった時には地域の方が、こうしてください、と直接言えるような場になってほしい。今はまだそこまで自分たちの場になってない、取り戻してないんですね。本来、自分の庭だったとしたら、「いや、ちょっと待って」と言えるはずなんです。かつてのお参りの範囲は、すごく広がり、全世界から来られるような状態ですから、なかなか理解していただくのは難しいですが、もう一度それが自然とできるよう、地域の方々と一緒に作り上げていきたい。それこそがお社が地域に存在している意味がある、そういうふうを考えています。



三島 ありがとうございます。本当に最後に素晴らしいお話をいただきありがとうございます。注意書きばかりあるんじゃないかと、地域の方と、そして海外の方含めて、最終的に人間が持っている感覚というものを信じてくださっているからこそ、そういう場をこうして作ってくださっているんだろうなというふうに感じました。まだまだいっぱい伺いたいんですが、最後に一言ずつお願いします。

志村 最後に、宮司さんがおっしゃっていた「ともに

生きる場」、その象徴的な役割こそが神社なのだというお話、深く心に残りました。

祖母の話に戻りますが、祖母を見ていると「幸せとは何か」「人間の生き様とは何か」ということを深く考えさせられます。101歳にもなると、藍染めで言うところの「甕覗^{かめのぞき}」のような境地になっているのです。「甕覗」とは、藍の生命が尽きる寸前の、本当に淡く澄んだ色のことです。人間的な雑味が消え、いろいろなものが削ぎ落とされて、その人の本質だけが最後に残っている。祖母は今、そんな姿を見せてくれています。人生をトータルで考えた時、私たちにとっての幸せや願いとは一体何なのか。最後にはそこに思い至るのだと思います。

ただ、今の社会には、それに答えてくれる場所がなかなかありません。私自身は、「ともに生きる」というのは、他の生命と自分の命が繋がり合うこと、それこそが本当の喜びに繋がるのではないかと考えています。

「なくなる（死ぬ）」ということは、「次の生命が生まれる」ということでもあります。昔はそこに命の循環があり、先祖がいて自分たちがいて、そして次の生命へとバトンが繋がっていく感覚がありました。しかし現代はそこが分断され、生命が孤独になっています。これはある種、不幸な状況です。だからこそ、どこかで生命が「開かれ」、別の命と繋がるような体験が必要です。それは宮司さんのおっしゃる「ともに生きる」ということであり、お互いの命が交換し合い、響き合うような経験です。今、時代は逆方向——分断の時代、AIの時代へと進んでいますが、だからこそ、そういった「命の繋がり」を感じられる場作りを、少しでもお手伝いできればと願っております。

三島 ありがとうございます。

佐々木 おっしゃっていただいたとおり、もっと言えばひとつの命を生きているんだという感覚です。自分の命が仮になくなったとしても、それはどこかの命につながっていくわけで全体はつながっていて自分の体がなくなってしまっても自分は一員であり、自分だけの幸せなんてそもそも存在しない、全体が幸せであっ



てはじめて幸せである。これから、神社としては、それを表現する場がお祭りであり、大きなことは何もできないけれども、1つ1つの地域がそういった思いをしっかりと持ってやっていくこと。そんな考え方や思いが、外へ広がっていけば、いずれは、いい世の中になっていくんじゃないかなと考えております。

三島 ハレトケ市はこれまでも参加していたのですが、今後もずっと参加したいなって思わず思ってしまう。ハレトケ市もこういう場に出させていただくことも、いろんな繋がりが生まれてくる。自分たちもその一つになっていけるという、そういう喜びの中にあるんだなっていうことを実感することができました。本当にいい時間を過ごすことができ、とても嬉しく思っています。かけあしの小一時間となってしまいましたが、またいつか続編をさせていただけると嬉しいなと思いつつ、名残り惜しいですが、これにて終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。



左から三島氏、佐々木氏、志村氏

III ムラサキ再生プロジェクト と植物「ムラサキ」のお話

紫野地域で活動中のムラサキ復活に向けたプロジェクトのご紹介と植物「ムラサキ」についてのお話をお伺いしました。

ムラサキ復活に向けたプロジェクトについて

ムラサキノハレ副理事長 平元 俊一 様

私は、宮司さんの思いなどを地域に伝える役割を担いたいという有志が集まった「ムラサキノハレ」という団体の平元と申します。本日開催のハレトケ市を主催する団体です。この地域は紫竹、紫野と、どちらも紫が入っており、諸説ある1つに、平安時代にムラサキが咲き誇っていたという説がありますが、私は紫野で育ちましたが実はムラサキを見たことがなかったんです。調べてみると、今は絶滅危惧種で古代から染料や漢方薬の薬として使われている歴史的な背景もあり、万葉集にも登場しているお花でした。現在、西陣織の産業、商店街や地域の衰退、高齢化・少子化といった問題、地域コミュニティの存続の危機、そしてどんどん町家が解体されて空き家が増えていくというような地域の課題がいっぱいある中で、みんながつながれる1つの要素として、ハレトケ市やムラサキを育てるというプロジェクトが始まりました。ハレトケ市は年2回、ここ今宮神社でお祭りをやっていますが、お祭りのハレを持ち帰って、日常のケの部分で人が繋がって生業や生活につなげていきたいという思いで始まり、そうやって出会ったメンバーでムラサキを育てることで人

と人とのコミュニケーションがうまれると思っています。そして、もう一度この花が咲き誇っている町を取り戻したいなというふうに思っております。活動にあたり、きょうと生物多様性センターに相談し、武田薬品工業京都薬用植物園をご紹介いただき京都産の株を分けていただきました。この夏の暑さでムラサキがなかなか育たずにいましたが、本日このように可憐な花が咲きまして、これからも少しずつ増えていけばうれしいと思います。そうして育ったムラサキでお祭りの衣装を染めるなど、地域のシンボルとなるような心の中に残っていくようなそんな活動にしたいなと思っています。ありがとうございます。

植物「ムラサキ」について

武田薬品工業(株)京都薬用植物園 太田 己翔 様

はじめまして。武田薬品工業京都薬用植物園の太田と申します。当園は、京都市左京区一乗寺で活動し、1933年から約90年の歴史を持つ植物園です。開園当初は研究所の1部門として、天然物由来の新しい医薬品の創出や薬用植物品種改良など約60年間続けておりました。現在は、それらの遺伝資源や植物を活用し、社会貢献活動を行う施設として、近年は本日のテーマでもある生物多様性を意識した活動を行っております。

薬という観点で見ると、現在使われている薬の5~6割が、植物をはじめ天然物の恩恵を受けてできているといわれています。また、今なお解決方法のわからない疾患も、植物をはじめとした生物多様性に解決策があるのではないかとされています。当園では、生物多様性を意識し、「守る」「つなぐ」「伝える」という3つのテーマを掲げて活動をしております。「守る」という取組では、京都の在来植物を収集、保全し、展示活用していくほか、種子をマイナス20度で冷凍保存し、次世代へ遺伝資源を伝えていく活動も行っています。活用という観点では、こうして集めた遺伝資源から苗を作り、その地域に根差した種苗として植物を育て、緑化に使っていただくという取組をしています。



最後に、植物の可能性、植物を未来へということ、現在生きている植物の中にも未知の力がまだまだ隠されています。そこで、研究者の方々にアプローチしていただけるように、植物からエキスを取り出し、ライブラリー化する取組も実施しています。

ムラサキはムラサキ科に属し、ムラサキ科はラテン語でいうとBoraginaceaeといいます。痔などの改善効果のある薬の一部商品にも入っており、薬としても重要な植物です。生薬名はシコンで、薬用部位は染料と同じく根の部分です。日本に限らず中国や朝鮮半島にも自生している多年草で、創傷治癒促進作用があります。紫雲膏という火傷などに効果がある漢方薬にも使われるなど、薬用植物としてもとても重要です。当園は長年この植物を調査研究しており、過去の調査では、北海道から九州の宮崎まで広く日本に自生していたことが分かっています。近畿圏では三重県伊賀と京都府の綾部と福知山市に自生していたことが調査で分かっています。



当時の調査写真を見返すと、自生地には群生している景色が写っていました。植物名「ムラサキ」の語源の一説では、“群れて咲く”という意味があるといわれており、それほどかつては野原に広く分布していた植物であることがわかります。綾部市と福知山市で最後に確認された自生個体の写真が残っておりますが、2022年京都府レッドリストでは、このムラサキは絶滅種に指定されています。この調査研究の延長として、遺伝子資源を守るため、綾部産のムラサキを園内で保持してきました。そして、地域性の遺伝子を持ったム



ラサキを育ててもらいたいという思いから、今回のお話につながりました。実際に地域の軒先に置いていただき、花が咲いたと伺い、大変嬉しく思っております。

古今和歌集には「紫のひともとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」という歌があります。現代語訳で言いますと、「紫草がただ一本あるためにこの武蔵野のすべての草がいとおしく思われる」と読まれているところがございます。この和歌の心を現代に重ね、紫野でも軒先でムラサキを地域の皆様と育てていただき、その一本の草を通じて、地域のさまざまな自然に対していとおしむ心を育み、愛され、そして地域に愛着をもっていただいたり、生物多様性に興味を持っていただければ、それで役目が果たせるのかなと考えております。引き続き活動して参りますので、よろしくお願いいたします。



おわりに

湯本 貴和

皆様ありがとうございました。私自身は植物学者なので、染料や薬用として植物や繊維植物に非常に興味があり、各地のいろいろな植物繊維の籠を集めて80点ぐらいあってどこかで展覧会をしようと思っています。本日の3人の御鼎談は、命とは何か、人生とは何か、或いは今のままの世の中でほんとのいいのかというようなお話もございました。

生命56億年で、ことばをもつ人間の時間が始まったのが5万年。10万分の1なので、さきほどお話のあった自然が大半をつくっていて、人間はそこにほんの少ししか手を加えていないんだというのは、そのとおりですが、こういう言語を介した人の知恵というのは5万年かけて作られてきて、例えばムラサキが地球上からなくなると、そういう知恵、知識もやっぱりなくなってしまいます。さらに言語を介しない自然に対する知識は、それこそ100万年前から続いているのです。私たちの生活は生物多様性或いは文化の多様性があって成り立っている。私は、様々な土地に行くと、必ずその土地の神社にお参りをします。土地の力というのは神社に集まっていると感じるのです。例えば非常に大きなご神木といわれるような木があって、その上にランの仲間やシダ植物などの小さい着生植物があって、それこそ絶滅危惧種がとて多くて、神社には土地の力が集まっていると思いますし、それを地元で守り育てこられた場所であることが非常に大事なことだと思っています。生物多様性や生物文化多様性というのも、土地の力の一つなんですよ。必ずしも外来植物を排除するわけではありません。日本人の主食の稲だって、もともとは外来植物ですから。外来植物だからといって、全部だめではないと思っています。日本列島のなかで外来生物も含めて、外来生物とともに生きてきたいろいろな人たちの知恵や文化も含めて、その土地の力だと思うんです。今、AIなどの急速な発展で、文明の曲がり角というふうにみんなおっしゃいますけれども、その中で私たちが忘れてはならないものの、途切れさせてはいけないものは生物多様性であ



り、生物文化多様性だと私は思っています。ムラサキは野の花ですが、野の植物というものを私たちは忘れてしまっています。明治のはじめには、国土の30%が野、いわゆる草原だったんですね。30%、つまり九州丸々ひとつ分が、日本で草原だったわけです。それが今は1%になっていますから、随分減っております。日当たりのいい野は、人々が火入れをしたり、草を採取して茅葺きの屋根に使ったりというように、草の用途があってそのために維持する必要があるって、そこに草原の植物がありました。それが屋根がトタンになったり、さまざまな道具がプラスチックになったりして、草に価値がなくなってきて、生態遷移が進んでだんだん木が生えてきて森になることで、野が失われています。野の植物が今、一番いなくなっているのです。春の七草は畑の周りの植物ですが、秋の七草は全部、野の植物です。秋の七草の植物の中でも、フジバカマやオミナエシ、キキョウも絶滅危惧種になっています。それは草に価値がなくなってきてしまって、人々が野を維持しなくなったから。もちろん私たちの生活も変わるので、昔のままというわけにはいかないんですけども、そんな中でも辛うじて生き残っているような植物を、何とか保護したり、それを使った技術を途切れさせないようにしたり、ということが大事だと思っています。そういう人間の暮らしに密着した生物多様性を取扱う中心的な役割を担うのがきょうと生物多様性センターであって欲しいと思って、日々仕事しております。今日はどうもありがとうございました。



後列左から太田氏、平元氏、湯本氏
前列左から三島氏、佐々木氏、志村氏

本開催にあたり御尽力いただきました皆様に、感謝申し上げます。

生物多様性と文化のつながり研究会

いのち 植物の生命と色

～染めの手仕事を通じて植物の「いのち」を感じるプログラム～

令和7年10月26日(日)
紫野 今宮神社

要予約
先着順



11:00～12:00
～染めのワーク「ムラサキ」
伝統的な草木染めの染(原染)から
■参加費：3,000
■定員：10名
※「ムラサキ」(紫)



13:30～14:30
～染めの手仕事「歴史から生」
染めの手仕事や今
時と人の共生の具
材から考えます。
■定員：40名

14:30～15:00
ムラサキ再生プロジェクトと植物「ムラサキ」

申込締切：10月9日
※応募多数の場合は抽選
※定員は、当日空きがあれば先着順

同日開催

10:00～16:00 ハレトケ市
千年史をたどる今宮神社に人が集うと、何が
生まれるのか「ハレトケ市」は自然に寄り
添い、きんなマリンツミといふことが起
る。紫野と隣接の魅力的な北山麓が舞台

主催：きょうと生物多様性センター 共催：京都市

植物の生命と色

草木染めは、四季折々の多様な植物の色を染し出しています。古来より人はその色を知り、豊かな感性を育んできました。万葉集にも登場する「紫草」は、中でも高貴な色を染める際に使用され、現在では大変希少なものとなっています。この際、この「紫草」に名前の変更があるともいわれる京都市左区紫野の「今宮神社」において、植物の色を体感し生物多様性の草葉と私たち人と自然との共生を考えるプログラムを開催します。

染めのワークショップ「ムラサキを染める」

11時00分～12時30分/今宮神社 新館
伝統的な草木染めの技法により紫野でハンカチを染めるワークショップ。
■講師：アトリエシムラ
■対象：中学生以上
■定員：15名(事前申込)※応募多数の場合は抽選
■参加費：3,000円(材料費として)

講座「染めの手仕事と今宮神社の歴史から生物多様性を考える」

13時30分～14時30分/今宮神社 参集所
染めの手仕事や今宮神社の歴史・文化と地域の暮らしなどの視点を通じ、自然と人の共生の在り方や豊かな暮らしとは何かを考えます。
■講師：アトリエシムラ代表 志村 昌司 氏
今宮神社 宮司 佐々木 恒久 氏
株式会社 代表 三原 利弘 氏
■参加費：無料 ■定員：40名(事前申込)
※応募多数の場合は抽選、当日空きがあれば先着順

ムラサキ再生プロジェクトの紹介と植物「ムラサキ」のお話

14時30分～15時/前庭に引寄せ席/今宮神社 参集所
紫野地域で活動中のムラサキ再生プロジェクトのご紹介と京都製品工業体京都産用植物園による植物「ムラサキ」についてのお話。
■お話し：京都製品工業体京都産用植物園 大田 己利 氏
ムラサキ/ハレトケ専務 平元 俊一 氏

申込締切10月9日(木) 申込フォームはこちら

アトリエシムラ
染織家・志村 昌司 氏。多彩な色調の草木染めを得意とし、女性色へと染め替える「アトリエシムラ」がコンセプトである「自然と共生のワーク」を行う。京都・嵯峨野にある工房で、美しい自然に寄り添いながら、四季折々の多様な草木で色染めや、小物づくりを行う。

株式会社
「ムラサキ」は、2014年10月、京都市左区・紫野
がらで事業開始。2017年に地元・京都にもアトリエシムラ
が、以来、上巻の展開で「一人一人」の個性を伸ばしてい
る。事業の中心は京都府「ムラサキ」。「紫」の染めが主
で「ムラサキ」から、さまざまな「ムラサキ」の文化
を、京都府の発展に貢献する。

京都製品工業体 京都産用植物園
京都府京都市にある産物振興、食文化の普及を目的とする多
業種の産物振興を推進・支援しを、(株)「アトリエシムラ」
「アトリエシムラ」の活動を支援して、産物振興と人々に貢献。産物
振興と産物振興を推進(「アトリエシムラ」)。

ムラサキプロジェクト
「アトリエシムラ」が主催する染織講座。京都府今宮神社の庭園が
中心となり、染織の文化を、神宮の文化を継承する
ための活動を行う。アトリエシムラ、今年度も開催。

<お問合せ>
きょうと生物多様性センター
TEL 075-744-1107 / 075-354-5275
※土曜日のみお電話で平日に限り受け付けます。
E-mail contact@kyotobdc.jp

【会場】紫野 今宮神社
〒603-8243
京都市京都市北区紫野今宮町21
市バス46番『今宮神社前』下車すぐ
市バス1・12・204・205・206・北8・M1番
『船岡山』下車徒歩7分

来場者アンケート

I 染めのワークショップ（参加者15名）

- ・桜色、薄紫と時が経つごとに色が変わっていく姿はとても面白いものでした。
- ・染色の技術のみだけでなく、植物のことや大切にされている心構えも知れて有意義な体験でした。
- ・紫根で染色するという貴重な機会をいただきありがとうございました。
- ・今宮神社で体験できたという思い出深い経験になりました。
- ・I could feel the nature so much. I can think of the earth, soul, plants.
- ・自然を感じる素晴らしいイベントでした。
- ・貴重な体験を今宮神社さまで開催していただきまして、感謝申し上げます。
- ・自然を感じる素晴らしいイベントでした。もっとアトリエの方にいろいろな質問をしたかったです。大満足です。
- ・とても楽しい時間になりました。これからもこのようなイベントを企画してください。



II 鼎談（参加者39名）

- ・地域、生命、つながり、つなぐ。いろいろな大切で面白いカードが出てきて考えさせていただきました。
- ・今日一日ムラサキについて学べ、また地域の植物に思いを馳せることができ、とてもよい時間となりました。
- ・人間ができる事が時代に押されてどんどん減っていくという気持ちでいましたが、本来の人間のできる事を考え直すきっかけになりました。
- ・どうか第二弾、第三弾と続けられますように。
- ・本来のお祭り（共に生きる）の意味について考えさせられました。地域を考え直す。ムラサキの話はとても良かったです。
- ・植物の色をいただいて染める草木染めの精神性に惹かれています。そして地域の願いを集約して神社や神様をつくりあげていき、その心を感じられる人を増やしていかなければならないというお話は、心に響きました。自身の生活をもっと見直したいと思います。
- ・神社と染織は、ベースに近いものがあるということが興味深かったです。
- ・宮司さんのお話とても共感しました。こういう方がいらっしゃる神社は地元にとっても良い場をつくあげられると思います。
- ・今宮神社でこうしたイベントをされるのはとても有意義だと思います。続きを楽しみにしています。
- ・異なる分野の方々のお話が繋がっているのが興味深かったです。
- ・自然の中で真剣に生きること、命⇒元気を伝えていくことを考えることができ良かったです。
- ・それぞれの団体の想いは理解できますが、それぞれを継ぎ育てていくことが重要に思えます。



本事業は、三洋化成社会貢献財団の御支援により実施いたしました。

2026.3 KyotoBiodiversitycenter